

令和 8 年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参 加 会 議： 第 75 回会議(三分野合同)

所属機関・部局・職名： Harvard Center for Population and Development Studies

氏 名： 古賀林観

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3 名程度)を挙げ、記載してください。〕

今回のリンダウ・ノーベル賞受賞者会議では、各分野の第一線で活躍する受賞者の講演を数多く拝聴する機会に恵まれました。いずれの講演にも共通していたのは、自らの研究成果を示すにとどまらず、科学が人類や社会に対して負う責任を真摯に問う姿勢でした。研究者としてのキャリアを歩み始めた今、科学が「何を明らかにするか」だけでなく「何のために、誰のために研究するのか」を改めて深く考えさせられました。

特に強く印象に残ったのは、核兵器をテーマとしたセッションです。リンダウ会議は、1955 年および 2024 年のマイナウ宣言に象徴されるように、ノーベル賞受賞者が核の脅威に対して科学者の立場から警鐘を鳴らし続けてきた歴史をもっています。登壇した受賞者は、世界が再び核軍拡へと向かい、多くの国が核武装への動きを強めつつある緊迫した現在の国際情勢を踏まえ、科学の進歩が人類に大きな恩恵をもたらす一方で破滅的な危険にもなり得ること、そしてその用途をめぐって科学者が沈黙してはならないことを力強く訴えていました。中でも、David Gross 博士による「Civilization の半減期はわずか 34 年である」という衝撃的な数字を挙げた発言は、強いメッセージとして深く印象に残りました。自らの専門分野の内側に閉じこもらず、研究成果が社会や政策に及ぼす影響にまで責任をもって関与すべきだというメッセージは、人々の健康と社会のあり方を扱う公衆衛生を専門とする私にとっても、自分の問題として深く胸に迫るものでした。また、夕食の席で David Gross 博士とご一緒する機会にも恵まれ、核兵器廃絶に向けた博士の活動における役割や、世界で唯一の戦争被爆国としての日本の立場について直接お話しすることができました。博士からは、日本はこうした運動に加わる最後の国になるだろうと思っていた、というご自身の率直な見方を伺い、深く考えさせられました。

また、Omar Yaghi 教授の講演も印象的でした。教授は金属有機構造体(MOF)に代表されるリティキュラー・ケミストリー(網目状化学)の開拓者であり、砂漠の乾いた空気から飲料水を取り出す技術や大気中の二酸化炭素の回収など、基礎化学の探究が水・エネルギー・気候といった地球規模の課題の解決に直結し得ることを、具体的に示していました。好奇心に根ざした基礎研究の力と、それを社会実装へつなげる構想力の双方が研究者に求められることを実感しました。分野は異なりますが、地道な基礎的探究を現実の課題解決へと架橋するその姿勢は、今後の私自身の研究の進め方にも大きな示唆を与えてくれました。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカーション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

受賞者との対話やインフォーマルな交流の場では、講演の壇上からは窺い知れない、一人の人間としての受賞者の姿に触れることができました。とりわけ印象深かったのは、偉大な業績の背後に、長い年月にわたる苦難や、常識に挑む勇気があったという事実です。

Nobel Hour での Katalin Karikó 博士との時間は、まさにその象徴でした。mRNA ワクチンの基盤技術を築いた博士は、その研究が長らく正当に評価されず、研究費の獲得に苦しみ、降格や不遇を経験しながらも、自らが信じる研究を決して諦めなかった歩みを率直に語ってくださいました。華々しい受賞の陰にある数十年の忍耐と情熱の物語は、これから幾多の困難に直面するであろう私に、逆境の中でも自らの問いを信じ続けることの大切さを教えてくれました。移民の女性研究者として道を切り拓いてこられたお姿からも、大きな勇気をいただきました。また、育児や家庭と研究をどのように両立してきたのかという質問に対しては、「両立することはできないし、どちらも完璧にこなすことはできない」と率直に答えられたうえで、家事は子どもに任せればよい、ハーバード大学の研究でも家事を手伝う子どもこそが将来成功することが示されている、とユーモアを交えて語られたことが強く印象に残っています。個人的にお話した際には、世界中から贈られた数百もの賞を受け取ること自体が大変な仕事であったという裏話も伺いました。博士がハーバード大学から名誉博士号を授与されたのは、ちょうど私が同大学で博士号を取得した年で、私の学位授与式でスピーチをされたご縁もあり、当時の「受賞ラッシュ」の舞台裏を直接伺え、とても楽しい時間でした。

また、Barry Marshall 博士とご一緒した昼食会も、忘れられない経験となりました。博士は、胃潰瘍の原因がヘリコバクター・ピロリ菌であることを、自らその菌を飲むという大胆な自己実験によって証明した方です。当時の医学界の常識に真っ向から挑んだ逸話を、ユーモアを交えて気さくに語ってくださり、確立された定説であっても批判的に問い直し、証拠に基づいて検証する姿勢こそが科学の核心であることを、改めて胸に刻みました。もっとも博士は、自ら菌を飲んだこと自体は本来あるべき科学の手法とは言えず、決して誇れることではないと率直に振り返っておられました。研究費の期限が迫るなか、動物を用いた実験がうまくいかず、やむを得ず自分自身で飲むに至ったのだと当時の事情を明かしてくださり、菌を飲んだ後は口臭がひどく、技術員が耐えかねて隣の実験室に移ってしまったという愉快的エピソードも披露してくださいました。さらに、ピロリ菌の保有者はアトピー性皮膚炎や喘息を発症しにくいことから、これらの疾患の治療への応用を研究しているものの、ピロリ菌は培養に時間がかかるうえ高価で(凍結乾燥したピロリ菌は一本で千ドルほどにもなるそうです)、研究には難しさが伴うのだとも語ってくださいました。世界的な受賞者が一人の若手研究者の疑問にも対等に、そして温かく耳を傾けてくださったことも深く印象に残りました。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

世界各国から集まった若手研究者との交流は、本会議の大きな魅力の一つでした。専門分野も文化的背景も異なる同世代の研究者と、研究への情熱や将来の展望を率直に語り合う中で、自分の研究を国際的な文脈の中に位置づけ直す貴重な機会を得ました。とりわけ、普段はあまり接する機会のない物理学者や化学者と直接語り合えたことは、大きな刺激となりました。彼らがどのような研究に取り組んでいるのかを知ることができただけでなく、量子コンピュータや、藻類が光合成に量子物理学の仕組みを利用しているという話題に至るまで、専門外の私にも理解できるよう丁寧に説明してくださり、異なる分野の研究者が同じ課題を全く異なる角度から捉えていることに触れて、学際的な視点の重要性を実感しました。また、私は現在アメリカを拠点とし、日頃はアメリカの研究者と議論することが多いため、ヨーロッパをはじめ各国の研究者と数多く言葉を交わせたことも、新鮮で興味深い経験でした。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

日本から参加した他の研究者との交流も、本事業ならではの財産となりました。分野を越えて第一線を目指す同世代の日本人研究者と交流し、互いの研究や、日本の研究環境が抱える課題、キャリア形成への思いについて率直に語り合えたことは、大きな刺激となりました。今回は、日本国内で研究する方々だけでなく、私のように海外で研究に取り組む日本人研究者とも知り合うことができ、実にさまざまな分野で活躍する多くの意欲的な日本人研究者の姿に触れられたことは、大きな喜びでした。アメリカを拠点とする私にとって、日本人研究者コミュニティの温かさを改めて感じられたこと、そして日本の学術環境の現状について知ることができたことも、有意義でした。第一線の受賞者や各国の研究者と接する経験を共有できる仲間が身近にいたことは心強く、会議後も継続的に交流できるネットワークが得られたことは、今後のキャリアにおいて貴重な支えになると感じています。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

(1)ノーベル賞受賞者による講演:各分野の最先端の知見に直接触れられただけでなく、受賞者の科学に対する哲学や社会的責任への姿勢に触れられた点が非常に有意義でした。核兵器をテーマとしたセッションや Omar Yaghi 教授の講演は特に印象的でした。

(2)受賞者を囲む少人数での対話(Nobel Hour、Science Walk 等):壇上では聞けない率直な言葉に触れることができ、受賞者を一人の研究者・人間として身近に感じられました。Katalin Karikó 博士の Nobel Hour や、Barry Marshall 博士との昼食は特に印象的でした。

(3)マイナウ島へのボートトリップ:会議を締めくくるマイナウ島への船旅は、和やかでとても楽しい時間となりました。長時間の船上で若手研究者同士がすっかり打ち解けて語り合い、個人的なつながりを深めることができ、生涯にわたるネットワークの礎を築くまたとない機会となりました。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット〔具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。〕

多様な背景をもつ数多くの研究者から大きな刺激と示唆を得られたことこそ、本会議の何よりのメリットでした。多くの受賞者や若手研究者が、世界が抱える課題の解決を強く志向し、いかにして世界をより良い場所にできるかを真剣に考えながら研究に取り組んでいる姿には、深く心を動かされました。分野を越えたそうした志に触れたことで、自身の研究テーマや研究者としての生き方を、新たな視点から捉え直す契機を得ることができました。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

私自身が国際的な研究コミュニティで活躍する研究者となり、日本人研究者として国際社会における日本の存在感を高めていくことを通じて、日本に貢献していきたいと考えています。具体的には、日本の研究者、とりわけ若手が、アメリカをはじめとする海外の場に挑戦することを積極的に後押しするとともに、次世代を担う日本人研究者の育成にも力を尽くしていきたいと考えています。本会議で得たネットワークと学びは、その実現に向けた確かな支えになると確信しています。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

本プログラムに参加できたこと自体が大変な栄誉であり、運営も驚くほど行き届いていました。世界中のノーベル賞受賞者と直接出会えることは、まさに「科学者にとってのディズニーランド」とも言うべき、人生を変えるほどの経験です。それだけでなく、世界各国からさまざまな分野の若手研究者が一堂に会するこの場そのものが、かけがえのない財産でした。すべての研究者に、ぜひ本事業への応募を心からお勧めしたいと思います。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)